

## 4 房総リゾートの始まり

海水浴は、夏の風物詩として全国各地において多くの観光客で賑わいます。古来より日本には「塩湯治」と呼ばれる海水による治療法が存在していましたが、明治初期にJ・C・ヘボンが健康増進を目的とした西洋医学療法を奨励したことをきっかけとして、神奈川県大磯において海水浴場が開設されたものが海水浴の始まりとされています。

房総でも明治20年代になると千葉郡稲毛村

(現千葉市稲毛区)に海水浴場を備えた療養所が設立されました。また、九十九里浜では、明治後期に中西月華<sup>なかにしげっか</sup>を中心とする文化事業団「向上会」により海水浴場が開かれ、案内冊子の発行や小説家徳富蘆花<sup>とくとみろか</sup>の来遊などもあって、片貝、豊海(いずれも九十九里町)などが全国に知られた海水浴場となりました。この九十九里浜の南方の一宮は、避暑寒地として海水浴場、別荘が設けられ、「東の大磯」と称されるようになりました。



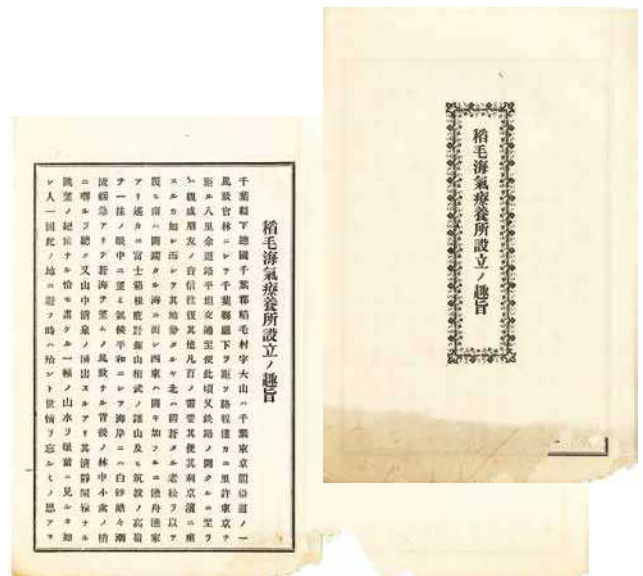
51.「稲毛海岸」(G・ピゴウ画) 明治36年(1903)

風刺画で知られるフランス人画家の作品。明治20年代に稲毛海岸にアトリエを持っていたことから稲毛海岸の当時の様子を描いた。



46.海水浴場加納屋支店海気館(『日本博覧図千葉県之部』初編より) 明治27年(1894)

石塚友吉が経営した加納屋は千葉町吾妻町(現千葉市中央区)にあった旅館。海気療養所が譲渡され、加納屋支店となった。



44.海気療養所設立ノ趣旨 (明治22年)(1889)

医師であり、政治家であった浜野昇が海水浴の健康効果に着目して療養所の開設を計画。

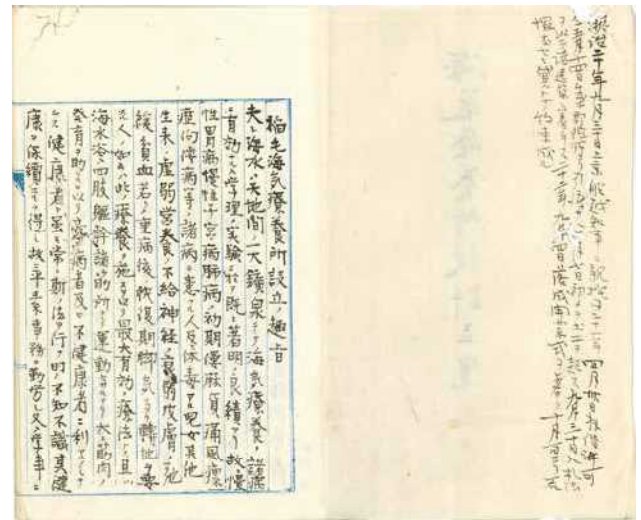


# 稲毛

千葉県において、海水浴の近代的な療法を提唱したのが、医師でもあり政治家でもあった浜野昇です。明治22年(1889)、浜野は、松林の鬱蒼とした景観、東京からの交通の便の良さ、地質気候など好条件を備えた稲毛村に「海気療養所」を開所します。

海気療養所は千葉町吾妻町(現千葉市中央区)において旅館加納屋を営む石塚友七に譲渡され、「加納屋支店海気館」として生まれ変わり、戦後まで利用されました。

海気館は小説家林芙美子が昭和9年(1934)に書いた作品『追憶』に「赤や青の色ガラスがはめこまれている明治の建物」と形容され、島崎藤村、徳田秋声、森鷗外などの文人が滞在したことも知られています。



45.海気療養所設計立案 明治22年(1889)  
資料右頁には、落成開業式後すぐに石塚に譲渡する旨記載がある。



53.海水浴保養場海気館真景 明治  
海気館印刷所による石版画。



47.北総旅行記并甲信遊記 明治42年(1909)  
中学生の随行指導として北総を巡り、銚子から東京へ帰る途中に「加納屋支店」に宿泊した。



48.千葉市内汐干狩海水浴釣場案内図 昭和35年(1960)  
戦後再開された汐干狩等の県外向け案内図。峰庫治の作。

## 4 房総リゾートの始まり

### 一宮

一漁村に過ぎなかった一宮ですが、明治30年(1897)に房総鉄道が一宮まで延伸されると、避暑を求める東京方面からの海水浴客で賑わいを見せるようになります。各旅館は同盟組合を設け、鉄道会社とも協力して、宿泊料を一定に定め、来訪者への利便と安心を与えました。また、海や山があり釣や猟もでき、避暑寒に適したことから、政治家、軍人、富豪等が競って別荘を建て、海浜の別荘地は、白い海岸と青々と続く松林の中にあり、丘陵地にあった山手の別荘地は、眺望絶佳であったといえます。

また、徳川15代将軍だった慶喜は当地の風景

を写真に残し、小説家芥川龍之介は、一宮の思い出を『海のほとり』や『微笑』などの作品に綴っています。



70. 絵葉書(房総名勝一宮海水浴場)

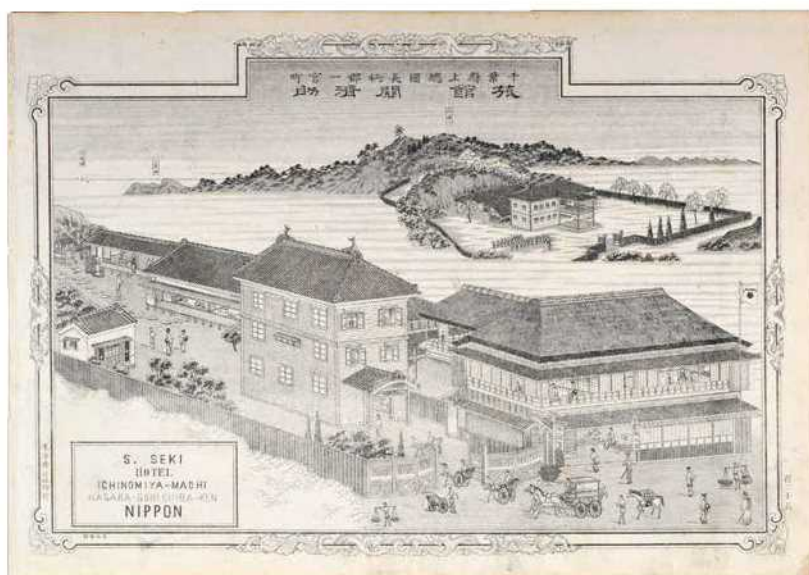


72. 絵葉書(一宮名所海水浴場)

54. 旅館 関 清助(『日本博覧図千葉県之部』後編より)

明治29年(1896)

関清助が経営した旅館、一宮倶楽部。



63. 芥川荘 平成30年撮影

小説家芥川龍之介が滞在したことから名が付けられた。国の登録有形文化財(建造物)。



57. 絵葉書(一宮海岸御林貸別荘) 明治

66. 絵葉書(一宮八景一宮海水浴旅館) 明治

